

## 「AはBの象徴」形式に関する考察 糸山泰斗 (東京外国語大学大学院博士後期課程2年)

## 1. はじめに

本研究は、「AはBの象徴」という形式<sup>1)</sup>に注目し、辞書の記述と先行研究を踏まえて、実例に基づき3つの用法を明らかにする。

## 2. 先行研究の検討

## ・「象徴」の辞書の記述

- ・ことばに表わしにくい事象、心象などに対して、それを想起、連想させるような具体的な事物や感覚的なことばで置きかえて表わすこと。(『日本国語大辞典』第二版)
- ・直接的に知覚できない概念・意味・価値などを、それを連想させる具体的な事物や感覚的形象によって間接的に表現すること。(『大辞林』第四版)

## ・「AはBのシンボル」形式について (森 2003, 2013)

- ・「ブランド品は成功のシンボルだ」…「抽象概念」の「具体化」。
- ・「エッフェル塔はパリのシンボルだ」…全体の中の代表を表す。

→「シンボル」を「象徴」に言い換えた場合、「ブランド品は成功の象徴だ」「エッフェル塔はパリの象徴だ」のように、極めて近い意味を表すことがわかる。

→「象徴／シンボル」は「AはBの象徴／シンボル」という形式においても、特徴を共有するものとする。

## 3. 「AはBの象徴」形式の3用法

## ●抽象的な概念等をより具体的な事物等で表す形式①

- ・(1)「平和の象徴として親しまれるハト」(2)「四つ葉は幸せの象徴。」<sup>2)</sup>  
→辞書の記述を参考にすると、「抽象的な概念・事象であるBを、より具体的な事物等であるAによって表す」形式。

- ・AとBには、類似関係や「全体一部分」関係等の関係性はない。  
→社会通念上定着している。

## ●抽象的な概念等をより具体的な事物等で表す形式②

- ・(3)「ネズミは多産で子孫繁栄の象徴といい…」(4)「赤は情熱の象徴で、激しい感情を呼び起こす攻撃的な色だと…」(5)「昭和の高度成長の象徴だった新幹線は、…」

→①と同様により抽象的なBを、より具体的なAによって表す。

- ・①とは異なり、②はAとBに何らかの関係性が見出せる。

→(3)「多産」である「ネズミ」と人間の「子孫繁栄」、(4)「赤」は「激しい感情を呼び起こす攻撃的な色」(情熱的)、(5)昭和の高度成長を構成する中心的なものとしての新幹線。

→AとBの関係は、(3)は類似関係、(4)はメトニミー関係、(5)は「部分-全体」関係。

## ●AとBの関係が「種-類」関係の「AはBの象徴」

- ・(6)「ユーチューバーはいまや若者の象徴ともいえる存在になりました。」  
(7)「新市民層のシンボル(象徴)だった『団地族』の一員になって、…」

→(6)は「ユーチューバー(A)」が下位カテゴリーで、「若者(B)」がその上位カテゴリー。(7)は団地に住む人である「『団地族』(A)」が下位カテゴリーで、「新市民層(B)」がその上位カテゴリー。

- ・AとBが「種-類」関係であることに加えて、AがBの理想的なもの、憧れであると考えられる。

→(6)の場合、「ユーチューバー」は子どものなりたい職業ランキングで上位に入ることから若者の憧れと考えられる。(7)の場合、当時「ステンレス流しやアルミサッシのガラス戸の高級感(7)の後文脈より)」を有する「団地」に住む人々は憧れの的であったと推測できる。

<sup>1)</sup> 「Bの象徴であるA」等の形式も考察の対象とする。

<sup>2)</sup> 例については、聞蔵Ⅱビジュアルで抽出し一部抜粋して取り上げる。